
リバイバル・ヨミ・プロジェクト

企彩櫻花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リバイバル・ヨミ・プロジェクト

【Zコード】

N1415D

【作者名】

企彩櫛花

【あらすじ】

主人公、平田陸は交通事故によって死んでしまった。死んだ後の世界で出会った神様と生き返るために三日間だけ生き返り、『神宝』というものを探すことになった。しかし、現実的ではないものばかりを神様に見せられることに・・・。

プロローグ

キーッ！ガツシャーン！

交通事故だ。それだけは理解できた。

加害者、ドライバーの人。被害者、自分。

急いで救急車もやってきたようだが、勢い良く頭を打つたせいか、失神状態でその場に恐ろしい姿で寝込んでいた。

病院に運ばれて、妹、陽奈の声を聞いた気がしたが、いつの間にか自分が起き上がったときはそこに現実という空間は存在しなかつた。

「どこだ？ここは・・・。」

と、独り言を呟く。下には青く見える透明な道、それが駐車場のようにぐるぐると上のほうに上がっていくように見える。そして、その後ろ、崖のように下が真っ暗なとてつもなく大きな穴が開いていた。

あえて下に落ちるといつ手もあるが、そんなことしたらたぶんだが、どうにも

ならないだろう。この場合は上に、上にひたすら登り続けるしかない。

しばらく滑つて転び落ちそうなくらいの急な坂を歩いていると平原な所に着いた。そこにはとてもきれいな青い液体が流れていって、何やら、人が白い宗教のような服を着ていて、笑顔で自分を迎える。そこには、船とオールがある。その青い液体の先に何があるかはここから見てもわからない。渡るのか？そして僕は後ろを振り返る。「道が、無い！？」

再び前を向くと白い宗教のような服を着た人が手招きをしている。早くしなければ今自分の立っている道まで消えてしまうのだろうか？僕は白い宗教服を着た人の乗った船に乗る。

よくこらつしゃいました

頭に誰かが語りかけてくる。

私は神様です

なんて悪い夢だ。確かに僕は交通事故にあった。しかし今は病院の真っ白なベットに横になつていいはずだ！

「どうぞ」

白い宗教のような服着た人は無表情のまま言つ。そして目の前にはヒガンバナの花畠。

さあ、ここは天国です

神様らしい人はヒガンバナの花畠を天国と呼ぶらしい。縁起が悪い事だ。ま、直にこんな夢覚めるだらう、天国とやらを満喫してやろうと思つ。

「つ！」

夢か・・・。

そう思つて起きたつもりが、今いるのはベッドではなく、青く見える透明な道だった。死んじゃったのかな？僕・・・。

そう思つてもしょうがないので、再びこの長い道を登り始めた。

第一話 不条理な現実

「だる・・・。」

と、神様らしい人が言つ。なんと「ここまで来ての態度だ。

「あんさ、神様つてね、偉い人のはずなのに、なんで三途の川の前で死んだ人をいちいち待つていたりさ、長い長い三途の川を渡る船のオールを漕いだり、その後はな、この忌々しいぐらいに花の匂いのキツイ畠なんかに行かなきゃいけないんだ。」

・・・・・神様つてこういう人なんだ?と、疑問を持つ。いい加減な人で、いい加減すぎる人だ。

「とりあえずね、街はここから三キロメートル程あっちの道を歩けば行ける。あと、街に行くときは、入場するために必要なパスポートがある。それは今な、俺の手元にある。タダでやるから、ほら、さつさと言ってくれ。」

「は、はあ・・・。」

「ここから三キロメートル・・・遠いな・・・。さつきまですごく急な坂を登つていって、オールを漕ぐのを手伝わされたつていうのに今度はそんなに歩くつていうのか・・・。」

「あと、言い忘れたが、ここから超オトク情報だ。」

「オトク・・・情報?」

神様からのオトク情報。いつたい何なのか。神様の世界でのオトク情報。人間界級ではないということになる。

「今まで忘れていたせいで、一万年ほど誰にも言つてなかつたが、実はな、三日間だけ生き返るキャンペーンがある。これはお前らの世界で言つ一萬年ほど前から、一十一世紀の始め頃。正確には二千七年十一月二十四日、今日までなんだ。それでな、三日間以内にだ、『神宝』というものを手に入れれば、生き返ることが出来る。」

「へへ。そうなんですか。」

つまりこのキャンペーン対象は自分だけってことだ。そして、『神

『宝』というものを手に入れれば、生を返すことが出来る。つまりだ。今、自分は死んでいる。

「それでだ、その『神宝』を探すための話だが、あくまで俺は生き返らせると誓つただけで、その魂を現実界、リアルと言えば良いか。ここはジオルといつ。そこで動かすための体が必要になる。それは生きている上に、その体の持ち主から許可をいただく必要がある。なんかややこしい話になってきた。

「だからだ、体が無ければ、このキャンペーンも受けられないということだ。だから、今から六時間以内に体を捜して来い！リアルに六時間だけ帰らせてやる。」

「は、はあ・・・。」

なぜか命令された。タイムリミットは六時間、だとのこと。

「うわあ！？」

急に目の前が真っ暗になる。そして、いつの間にか着いていた。自分の体と、それ以外の人の体が見える。自分の体は動いていた。死んでいるということだ。つまり、自分の体以外で動く必要があると言つこと。

「お兄ちゃん・・・・・・」

陽菜が僕の目の前で泣いている。タイムリミットは約五時間と五十八分。まだまだ楽勝だ。よし、陽菜の体を借りよう。

陽菜、聞こえるか？

僕は現実に聞こえる声が出せないのでテレパシーのよつなもので語りかけてみる。

「・・・・・・」

相変わらず陽菜は泣いたまま・・・・・やはり通じないのだろうか。

陽菜！聞こえない？

「お兄ちゃん？」

通じた！

陽菜、聞こえるか？今兄ちゃんは幽霊になつてお前にお願ひを

しに来たんだ。

「ゴーレー？ お、お化け！？」

声に出さなくていい！ 心で話せば大丈夫だ！

「わかった」

だから心で言えれば…………ほり、父さんや母さんが変な目で見てるぞ！

『わかった。聞こえる？』

ああ、聞こえるさ。

『了解』

で、早速頼みたいのだが…………

『うん、でも死体を焼く時に一緒にお兄ちゃんのベットのベットカバーの裏に縫い付けてあるポケットの中にある工口本と一緒に燃やせって言つお願いは勘弁ね』

ああそれは大丈夫…………って何故それを…？まあいい、お願ひというのだけど…………陽菜の体を貸してくれないか？

『え、や、ヤダヨ！』

いくら兄のためといえども陽菜も十四歳…………さすがに兄なんかに体は貸したくないはずだよな…………。

じゃあこうこう話に持ち替えてみよう。僕を三日間だけ生き返させてくれないか？

『三日間だけ？ なんですよ。どうせならずっとでも良いの』。

いい加減な神様にさつき会つててきた。嘘じゃない。紀元前七千年から二十一世紀の最初ぐらいここまでよくわからないキャンペーンがあつてな、それに参加するためさ。

『その神様の話もキャンペーンの話、嘘でしょ？』

本当だ。今までお前に嘘をつくことはありすぎたが、今度は本当だ。そのキャンペーン、内容についてだが、三日間他人の生きた体を借りることを条件に、参加が可能です。この世のどこかに置いてあるところの『神宝』という宝を見つければ、生き返ることが出

来ます。たつたそれだけだ。

『ますます嘘っぽい。』

と、まあこんな感じに信用しようとしたマイシスター、こうして一生のお願いと言つべきなのか知らないが、生きていないので言えない兄の頼み。

まさに歯車で例えたら、両方とも噛合わずにぶつ壊れるね。

『お兄ちゃんも、結局、生き返りたいんでしょ。』

いや、生き返りたいわけではない。ただ神様に無理やり参加させられたというか、キヤンペーンに参加し終わるまで天国から追い出されたと言うか・・・。

どうしたことなんだろ？ 結局ここまで来ての話だが。

『お兄ちゃんみたいな人が天国行けるんだね。そっちのほうに驚いたほうが良いかも。』

ちなみに言つておこう。体を借りるために用意されてしまった期間は六時間です。ここに時計を確認する限り、あと五時間五十五分ぐらいだ。

と、一日考えさせて、と言わせない作戦に出る。誰でもわかるだろう。重要な考え事はなぜか一日考えてしまう人間の特徴のことを。

『で、お兄ちゃん。』

なんだ？

『姿、見せてくれない？』

『無理。やり方知らない。でも心靈現象なら起こせるかもしけない。ポルターガイストとか。』

『やつてみせてよ。本当に幽靈さんなのか確かめてやる。』

そんのは必要ないな。まずテレパシー的なことを今やつていい。つまりそれ自体が僕が幽靈だという証拠だ。

『私の勝手な妄想かもしないでしょ！』

と、なぜか心の会話で怒られる。これじゃ一方的な以心伝心をする気じやなくなる。

『とりあえずねいろいろな意味でこの体を貸しちゃ、いけないの。』

わかった?』

『 そうか、今ならもし生き返ることが出来たら、ケーキとかお菓子とかおじりてやってもいい気分なんだけだな。

とりあえずこの方法をとつてみる。妹の好きな食べ物、甘いものオノリーだ。

『 本当に…? ジャなかつた…。そんな釣竿は簡単に破壊しちゃうよ。』

とのことだ。この妹、なかなかしぶとい。

『 しようがない。じゃあ言おう。僕はね、今ならどんなことでも出来る。お前操ることができる。幽靈さんだからね。田の前に怪物を出現させて驚かせることも出来る。幽靈さんだからね。お前の存在を消すことも出来る。幽靈さんだからね。それでも良いのか? こんなに言い張った。しかしだ。こんなこと出来ない。単なる脅しで、いろん

な意味で大人が子供に[話すこと]をきかせるときの[冗談に聞こえてくるような感じ]もする。

『 そんなん。お兄ちゃん、そんなんことしないよね?』

『 お前が僕に体を三日間貸してくれたらな。』

『 しょうがない。存在消されたくないし、生き返って欲しいし、許可するよ。』

サンキュー。

『 ただし! プライベートな時間、趣味の時間、私が断固拒否したその時間、以外の時間だけだよ! わかった! ? 絶対変なことするんじゃないよ! わかったね! 』

と、テレパシー状態だからこそ言えるようなことを連発された。意外とコイツの本音はかなりヤバイ。

でも、そう言つたからには、とりあえずだ。とりあえず体を借りることに成功した。

『 じゃあ、神様のところに戻るね。』

『う、うん。絶対戻つてくるんだよ。』

ああ、保障はできないが約束する。

そう言った途端に、再びあの嘔吐寸前の状態になりそうな、目の前の真っ暗が訪れる。そして、目を開けた。

第一話 蘇生の法則

そう言つた途端に、再びあの嘔吐寸前の状態になりそうな、目の前の真つ暗が訪れる。そして、目を開けた。

再び川の目の前に、宗教的な白い服を着た・・・いい加減な神様がいた。

「やりましたね」

「やつてやつた」

「でもよくやれましたねえ・・・前回のキャンペーンに弾かれた人は体の提供人が見つかなくて・・・」

「追放したのか？」

「追放するわけないじやない！んな事したら地獄の玖劉閻魔に怒られちゃう・・・」

「閻魔に怒られちゃうって・・・」

「ちなみに玖劉閻魔は教師も始めたらしいぞ」

「そんな無駄知識はいいからはやく次のステップへの行きかたを教えてよ」

すると神様は呆れた顔をした。

「神様は無駄な話をしないんですけどお・・・」

「じゃ、じゃあ次のステップって・・・」

「丑刻ちゃんに最寄のハム園に行つてね！」

「関係ないじyan！・・・つてかハム園じゃなくて公園だろ公園！」

ほんといい加減な神様だな。

「じゃ、行つてらつしやい！」

「ちょっと待つてよ！まだ何をすればいいのか・・・

「行けば分かります！」

そして目の前が真つ暗になつた。これまた嘔吐寸前になりそなこと。目をつぶっているのにくらくらする。

ちなみに、目を開けたときにはもう幽霊なのに動く体力が無くなるほどキツイ状態だ。さらに言えば、目の前はハム園……じやなかつた。公園の看板がある。

「もう着いてるし……。」

見慣れもしないどこだか知らない公園だ。

今さら思う。丑刻ちゃんって誰だろう。って。さらに思つ。今回のキャンペーン、対象が僕にしか無い上、僕以外に神様は話していない。つまり、前回のキャンペーンの人の話はまったくの嘘だと思う。

「やつと着いたね」

と、いつの間にか目の前にいたまるで自分が待つてたんだぞ、みたいな感じにしゃべった神様がいる。

「こちらは驅吐寸前なのあちらは超笑顔。うぜえ。殴りたい。

」というわけで、このハム・・・公園には何があるでしょう。「きつしりとハムと言いそうになつたこのいい加減な神様はいきなりクイズ。答えられない。

「わかりません。」

「君は正直なんだな。というかさ、マジで面倒なんだけど。あのさ、まずこつちは『神宝』の場所を知つていいのに、なぜキャンペーンの対象が一人の人物に探させなきゃいけないんだみたいな感覚なんですけど。ねえ、もう面倒くさいからさ、十秒でキャンペーン終わらせてくれない?」

「じゃあ『神宝』のある場所教えてくれるんですね?」

と、なんだかチャンスになつてきそうな勢い。

「いや、『神宝』のありかを教えたのばれたら給料減っちゃうからいやだ。いわゆる減給。本当に神様つて給料少ないんだぜ?この世、リアルでは恐ろしく偉い人のイメージがあるけど、最近、教師を始めた閻魔の半分の半分の半分の六倍ぐらいだけなんだからな。」

「つまり四分の三つでわけですね。やっぱり神様も給料とか貰つてるんですか。」

率直に一番最適だろう質問をする。

「ああ、貰わなきゃあんな仕事できないね。面倒だぜ。神様は。四兆八千億人程度いるんだがな、俺は、この日本という国の係りをしている。他にも日本を担当しているやつらがいる。だから、死ぬやつが一分に一人だとしても、俺はあんまり働かないですむんだ。ちなみに、地球という星には、神様なる存在が三百万人はいる。」「多いですね・・・。」

三百万人、つまり、それを大体国の数の一百で割つたとしても、一万五千人は日本に神様がいることになる。

「てことは、キャンペーンを受けている人はたくさんいるんじゃないですか？仮にあなたが言い忘れたとしても、他の人が言つてくれるでしょ。」

「いや、それは無いんだ。日本という国だけでのキャンペーンでなくして俺たち神様はネットワークのように全員の意思が繋がっているんだ。だから、もうほほ顔が違うだけの同一人物つて考えちゃって良いよ。」

「面倒くさい神様ですね。」

手がかりを手に入れる。この会話の内容からして、『神宝』は日本の中にある？と思われる。

「お、頭良いね、君。『神宝』は日本の中にあるんだぜ。」

「今ので減給ですよ。」

「あ・・・まあ良いの良いの一放つとけばいいんだよ。ばれたらばれたで、放つておけばいいの！」

まさしくいい加減な神様。

「で、ここで何をするんですか？本題に戻りますけど。」

「ああ、ここで魔方陣を書くんだ。これとこれでな。」

僕の手に渡されたのは、電池で動くと思われるペンライトに、その魔方陣とやらの図形みたいなやつだ。

「ペンライトのスイッチを押して先端部分が光るから、その光で書

く。この図形のとおりにな。ああ、慎重にならなくて良い。大体合つてればいいの。大体ね。」

と、いい加減な説明を受けて納得した後、作業に入る。

僕の体は浮いてるので、まだ動くのに慣れていない。だからと言つて、地面に着こうとするそのまま通り抜けてしまう。なんとも悪条件。しかし、神様は大体で良いと言つていたので、円から書き始めて、その中はあとで大胆に書くことにする。

「意外と、難しいな・・・。この図形単純なのに・・・。」

そのとおりだ。この図形。円と、その中に正三角形が二つ重なった形に、その重なった部分の中によく意味のわからない文字みたいなものを書くだけだ。一文字。

しばらくして、それっぽい図形が出来た。円はぐちゃぐちゃ、正三角形はもはや三角形じやない、その真ん中の文字みたいのはまあまあ大丈夫かな？みたいな美術で赤点どつてもおかしくはない図形が出来た。

「次に、その文字が書いてあると」の真上に行くんだ。」「

「は、はあ・・・。」

だんだん怪しい気分になってきたが、とりあえず、神様の指示に従う。

だいたい真上の部分に行つたつもりだ。その数秒後の話。

その魔方陣みたいなに吸い込まれた。そして、再び嘔吐寸前になりそうなこの真っ暗な空間について、またどこかに放り出された。

「「」は？」

「「」は、異世界、『リアル』でも『ジオル』でもない。『エクサ』という。数字で言えば十の十八乗、わかりやすく言えば、百京だ。」「ひやつけい・・・・・すごいな。」

恐ろしい数字が現れる。しかし、この空間に何があるのか、さっぱりわからない。ちなみに、なぜかそこに置いてあつた、時計をみると、あと五時間二十分钟以内に妹の体に入らなければならぬ。ここ

で何をしたいのだろうか。

目の前には、なぜか水鉄砲。と、バケツ。何があるんだろう。

「聖なる水をバケツ一杯に入れて来い。三十分以内にだ。あと、そこにある水鉄砲に入っているのは、ただの水。しかし、威力は恐ろしいからな。なぜか補給しなくてもムゲンに出てくる水の不思議さには驚くだろうね。そして、その水鉄砲、重さ三十キログラムの物なら軽々飛ばせる威力があるから、武器として使ってくれ。」

「は、はあ・・・・・」

なにやら威力が恐ろしい水鉄砲を持たされてた。本当なのか確かめるためにためしにそこの瓶に水をぶつけてみる。

「・・・・・なぜ？」

と、驚く理由。それは、瓶に穴がきつかりと開いているからだ。破片が弾けたりしない。なぜだろう。

「さあ、わかつただろ！ さつさと行つて来い！」

と、押し飛ばされる。何も見えなかつた、その先にはゲームでよく見そつなモンスターがそこらじゅうにいた。つまり、水鉄砲でこいつらと戦つて、先に進めつてのか・・・・。

「おりや、おりや！ おりやあ～～！」

とりあえずオレは目の前にいるモンスターを倒し道を開く。それにしてもやはりこの水鉄砲は凄い！ 一度引き金を引くとモンスターを五体くらいを一気に蹴散らせるほどだ！ しかも水切れ無しと来た！ 生前Wi-Fiのバイハザードにはまつたがこれはそれ以上の快感だ！

そしてあつという間に道が出来る。

オレが同じように敵を蹴散らしていくと田に前には広大な泉が広がっていた。

「これが・・・・・聖なる水」

オレはバケツに水を汲む。そして始めの場所へ戻ろうとした。しかし何故かどんどんバケツは軽くなっていく・・・・・・

「ん？」

そしてオレはあることに気が着いた・・・・・・

「穴・・・・開いてんじやん」

ふざけた神様だ！生き返つたら絶対閻魔にあつてあの神様を地獄行きにさせてやる！！しかし水が漏れていることは仕方が無い・・・どうすれば？

「あ、あれは！？」

オレは目の前にあるカツプラーーメンの容器を見つけた。はめ込んで見ると大きさがピツタシだ！オレはもう一度聖なる水を汲みに戻つた。

「あれれ・・・」

水鉄砲の水同様、どんどんいつの間に沸いてきたモンスターが出てきた。

「とりあえず、意味がわからぬいぐらいに繁殖してるみたいだけど、この水鉄砲があれば余裕だな。」

と、調子に乗りながら威力がヤバイ水鉄砲で情けない姿をさらしながら、敵を倒していく。

「あれ？」

確かにこの位置に泉があつたと思つ。そして、自分の手にはバケツがない。

目の前には神様がいた。

「なんで戻ってきたの？それからバケツは？」

「いや、バケツに穴が開いてたんで、戻ってきたんだけど一つの間に無くなつていて・・・。」

「穴？開いてたんだ。まあ良いか。」

とりあえずと、そんな顔を見せた神様はリアルで言つ携帯を取り出す。

ちなみに、そこに置いてある時計を見てみよう。とっくに三十分経つている。

「ちょっと待つてる。」

と言つて、エクサの世界からどうやつたか知らないが、どこかへ行つてしまつた。正確には消えてしまつたということなのだろうか。

「ねえねえ」

と、一言かけられる。誰だらう、と後ろを振り向く。

第三話 分身製造法

「こんなにちは、私は女神様だよ。なんでこんなところにリアルの人間がいるのかな？」

非常に優しそうな顔を見せて「コツと笑つ」この人、とりあえず、正直に話す。

「えっと・・・その・・・僕が事故で死んで、神様に天国に連れてこられて、生き返れるキヤンペーンの話を聞かされて、それに参加させられて、いつの間にかここに来てました。」

「神様？ というとあのいい加減でいい加減に消えて欲しくて弾劾裁判所で消失処分になつて欲しくて考えるだけで頭が痛くなるあのバカやろう？ それともあの勇ましい姿の天才でそれで頭もよくてかっこよくて、恋人にしたい神様ナンバーワン、それでね、お金持ちで、成績優秀で、家族はあの会社のオーナーで・・・。」

「ぜ、なぜか前者の方としか思えない暴言と、後者のほうに対する賞賛、なんという態度の違い。」

「ぜ、前者の女神様が大嫌いな方だと思います。あの人は本当にいい加減ですから。」

「おお！ 君、気が合うね。お姉さんとどつか出かけないかい？ 生き返らせてあげるからさ、ね？ 生き返らせるなんて簡単なことなのよ。わざわざ変なキヤンペーンに参加せずに『神宝』も探さなくても良いしねつ、とても楽に生き返られるよ。」

「と、女神様が言つ。とても好都合な話だが、非常に忌々しい性格の人だ。」

「おい、大天使、俺の客に何やつてるんだ？」

「女神様じゃないんですか？」

いつの間に戻ってきた神様が女神様を大天使と呼ぶ。

「そもそも言うな。でも、大天使は偉い。天使の中でも力が強いやつだ。しかし、嫌われている。」

「おい、そこの非常にウザイ紙くずのような神、仕事しやがれよ。
「仕事はしている。問題ありか？」

と、神様と女神様がケンカ中。なんという光景、もしかしたら出会つただけでいつもこうなっているのかもしれない。

「良いか、陸、コイツは大天使だが、非常に悪いやつでな。」

「おい、余計なことを言つんじゃない。」

「放つとけ、眞実を言つて何が悪い。嘘をつくのは神様としての仕事じゃない。それでだ、本来なら天使と悪魔は小さいまま移り変わりを繰り返すんだ。まず天使は人間の邪氣を食べてだんだんと悪魔へとなつていく。その代わり、人間に良い行いをさせるんだ。逆に悪魔は人間の良気を食べてだんだんと天使になつていく。その代わり、人間に悪い行いをさせる。これが基本だ。」

「へ~。」

なんかよくわからない話になつてきたが、なんとか納得できた。

「それでだ、この大天使は本来なら人間の邪氣を食べる、はずなのだが、良気を食べて、どんどん力をつけた天使になつていくんだ。これはジオルの法律で禁じられている。天使は邪氣、悪魔は良気しか食べてはならない。もし法律違反の場合、即刻リアルへ送られる。そして勉強しなおしだ。これが普通なのだが、こいつの場合には、力を付けすぎたせいで、誰にも押さえつけることは出来ないんだ。つてことは、ゲームで言つと序盤から最強の敵が出てきた。そういうことだ。」

「さらに言つておく。そいつに生き返らせられたら、完全消失の刑だ。いたという痕跡がすべて消えうせる。だから、俺だけに頼れ。」

「うるさい、たかが神が。お前を完全消失させることなんて簡単なんだ。それにね、私には力がある。だからお前を守ることは簡単に出来るんだ。」

と、なんだかどちらを選べばいいのかわからない展開になつってきた。でも、妹に約束した。

また戻つてくると。

「女神様、残念ですが、神様に頼ります。僕は妹と約束しましたから。」

「つち。しょうがない。リアルの人間には逆らえない性格だからね。」

偶然にも女神様の性格に救われた気分。しかし、なんかややこしいことになってきた。

「じゃあ、行くぞ。陸。聖なる水は俺がどうにか召喚をさせておく。次に手に入れるものは、『リーフ電池』だ。」

「電池？なぜ・・・。」

「『リーフ電池』が必要なんだ。物理分身というものをを作る。お前の保険だ。聖なる水とリーフ電池でお前の分身を作る。もしもの場合、完全消失を除いての話だが、お前は存在を残すことが出来る。このためさ。」

そして、再び嘔吐寸前になりかねない、真っ暗なところに飛ばされ、公園に出る。元の公園だ。住所とかは知らないけど。

で、リーフ電池とは何なんだろうか。電池はわかるが、リーフって・・・。葉っぱのイメージしか湧き出ない。

「『リーフ電池』とは、光エネルギーを蓄えてある電池だ。リアルで言う光合成という現象で蓄えたエネルギーだ。だからそれを、電池メンのところに会いに行つて、貰う。それだけだ。」

電池メン、電池マンの複数形だろうか。まあそういうことになってしまった。

「じゃあ行くぞ。」

「は、はあ・・・。」

再び真っ暗な空間へ飛ばされ、出てきた場所。

そこは蜂の巣の中身のような場所だ。そこら辺には手足の付いた電池、電池、電池がたくさんいる。

その中の一人が出迎えてくれた。

「ここにちは、私は電池メンの單一型と申します。」

神様が言う。

「『リーフ電池』が欲しいのだが。」

「わかりました。では単四型に持つてきてもいいましょう。」

と、言つて、五つもある笛の一つを出して氣味の悪い音を出す。

単一型よりもやせている電池がやつてくる。

「単四型です。今現在、『リーフ電池』がありません。材料があれば良いのですが・・・。特殊発光型リーフが必要です。」

「のことです。取つてきていただけませんか？」

と、頼まれた。神様は言つ。

「どこにある？」

単四型が予想してたかのように答える。

「この巣の出口を出たら森です。そこ光る葉っぱを持ってきてください。」

「わかった。」

そして僕は電池メンの巣を後にし、特殊発光型リーフを取りに森へ向かつた。

しばらく歩くと道が二つに分かれていて標識がある。標識には『太陽の森・月の森』と書いてある。

「どっちだ？」

ま、草つて事はもちろん太陽だろな・・・・・・そつ思つオレは左の太陽の森に向かつて進む。

「おい、おまえ誰だ！」

森に入つてしまふと突然誰かから声を掛けられた。

「上だ！上！！」

上と言われたのでオレは上を向く。

「・・・・・・」

そこにはギラギラと輝く太陽の隣にもう一つ小さな太陽が・・・・

・

「見えないのか？」

よく目を凝らすと黒い点が二つある。

「つたくしょうがねーなー」

そういうて小さな太陽が落ちてくる。

「オレッチはサン族のshineだ！シャインな！シャイン！英語で死ねと書いてシャインだ！忘れんじやねえぞ！」

「は、はあ・・・・」

「んで、あんた見た所リアルのお坊ちゃんじゃねえか！こんな所に何の用だい！？」

「特殊発光型リーフが欲しいんですけど・・・・・」

すると、シャインはニヤツとした。

「ま、いいんだけどねえ特殊発光型リーフはサンシャイン元帥しか持つてないんだよねえ・・・・・」

なるほど、サン族は元帥国家なのか・・・・・

「じゃあ会わせてよ！その元帥に」

「いいよ」

さつきニヤツとしたのでなにか企んでるのかと思つたが案外何も無かつた。

「サンシャイン様、お客です！」

シャインにつれて来られた所は森の奥深くだつた。

「密どな？」

「はい、特殊発光型リーフを取りに来たようです！」

「と、特殊発光型リーフじゃとーふざけるなーーーーー！」

そういうとシャイン元帥がいきなり襲い掛かつてきた。

「わ、や、やめてよ！」

しかしサンシャイン元帥は攻撃の手を休めない。

こんな時にあの水鉄砲があれば・・・・・

オレが落ち込んで下を向くと背中に何かが当たつた。

「こ、これは！？」

なんと背中に当たつたのはあの最強水鉄砲だつた。

目をつむつて水を連射する。

ジユツ！・！・！

謎の音が聞こえたので窓を開けると窓の前には黒い塊か・・・・・

「げ、元帥様！！！」

シャインがサンシャイン元帥に駆け寄る。そしてその声を聞いて

「お母さん、お父さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん、お祖母さん、お爺さん

オレはサン族にジリジリと森の隅へ追い込まれる。

「」

ノミコロトノシテ

もう頼れるのはあの声だけだ！オレは必死に声のする場所へダッシュする。

「大丈夫ですか？」

今オレの前に二日月の形をした生物がいる

「アーティスト」

「はい、ライトです。」

そう名乗るいかにも正義のヒーローみたいな顔をした人がいる。それと比べて、僕を出てから何こもしゃべらなハ一のハハ加減な神様。

なんてこつた。そして、神様はしゃべり始める。

とりあえずたまうちはシノリの人間だ。名前は無

「わかりました。月の森だからこそある特殊発光型リーフは素晴らしいのです。見ていつたらどうでしょうか？」

「ちがう、進む。」
とつて、月の森へ歩く」の一
行。なぜ月の森にあるのか疑問を持

「うへへ。すこしきれいだな。」

「そうだろ。俺も二、三回ここに来たことがある。しかし、この特殊発光型リーフ、問題がある。」

「問題?」

神様でも問題とする問題。何なのだろつか。

「後で話そづ。」

と、返事を拒否られた。しかし、この大量にある特殊発光型リーフ、今さらになつてなんでさつき太陽の森に行つたのかを後悔する。

「さて、ここから好きなだけ取つていつてください。」

と、言わされたので、手で異様にでかい特殊発光型リーフをちぎりつとしてみる。硬い・・・。

「ああ、そうだ。今さらになつて言つけど、さつきの問題についてだが、特殊発光型リーフは非常に硬くてな、その水鉄砲でも破壊できないんだ。」

「え・・・。じゃあどうやって持つて帰るんですか?」

さつきと黙つて欲しかつたことを言われる。神様曰く、水鉄砲でも破壊できないこの特殊発光型リーフ、つまり、三十キロ以上の力を加えなければ、持ち帰ることは出来ないようだ。

「そこで登場するのはこれさ。」

また鉄砲。黒く塗装されたこの鉄砲はエアガンには見えないほどに立派な鉄砲だ。

「これは、誰かの存在維持に必要な力を使って、発射するスラッシュユライフルと言つてな、誰かを犠牲に破壊する必要がある。」

「それは、無理じゃないですか?人を一人犠牲するつて・・・。」

「おいおい、まだそんなこと言つてないだろ。これを使うの。手動発電機というべきかな?というかそれに近い。」

「でかいですね・・・。」

どつかで見るトランシングマシンに似てる。

「と、言つわけで、陸。ここで走りに走つて発電をするんだ。」

なんで、と言つてしまいそうな、このマシーン、どうやらこの上で

走れば走るほどエネルギーがたまるらしい。

「じゃあ十五分間、ようい・・・・・ん！」

走り始める。

「・・・・・・・・・・・・」

「目が死んでんぞ」

人の苦労も知らないで・・・・・・・・

「しかしこれでエネルギーは溜まつたはずです！」

「よし、やつぞ〜〜〜」

神様は子供のようにようにはしゃいでいる。

ばん！――――！

とてつもなく大きな音と地響きがオレ達を襲う。
ぐらぐらぐら

何だか周りの木が揺れてるんですけど・・・・・・・・・・

「や、やばいですよ！」

「なぜだ？ムーン」

このKYKがあ――空氣よめ〜〜〜！

バサバサバサ

どんどん周りの木が倒れていく。

「ん～スラッシュユライフルを使うと大天使へのストレスも一発で爽快だなあ～」

だから空氣読みなさい――！

「神様！――いい加減にしないと女神様に言いつけますよ――」

一瞬にして神様の顔から笑みが消えた。これぞまさに鶴のワンボ

イス（一声）！

「直しますからそれだけは〜〜〜」

「じゃ、お願ひします」

人差し指をクイクイと動かす。そうすると、いかにもどんなトリックを使ったのかわからない、魔法みたいなのが発動される。

「と、いうわけではい。」

特殊発光型リーフを持たされる。リアルの葉っぱではこんな大きさは考えられない。それくらい重い。昔の大きなお金ぐらい重い。

「じゃあ、迷惑かけてすいません。ライトさん。」

と、苦労ばっかした僕が言う。神様は謝りうとしない。

「大丈夫です。とりあえず、これも持つていてください。」

と、ライトさんに言われる。今、僕の手にあるのはなにやらクッキーのような香ばしい匂いがするものだ。

「食べてみてくださいね。」

と、言われた。食べてみる。

おいしい。美味しい。との感想しかこぼせないほどおいしいクッキーだった。

「ありがとうございます。ライトさん。それじゃあひとつなり。」

「さよなら。」

そういうことで、月の森を立ち去り、とても重い特殊発光型リーフを電池メンの巣まで持つて帰る。

しかし、どうやら神様は納得いかないような顔をしている。スラッシュコライフル、本当に恐ろしい兵器だ。そして、電池メンの巣の入り口に着いた。

第四話 依然として俄然

「お帰りなさい。」苦労様です。」

と、ちよつとそこにいた単一型が言ひ。そこには単四型もいて、その単四型に特殊発光型リーフを渡す。

「ありがとうございます。」

そう言つてくれた。なんだか久しぶりに人に感謝された気がする。人じやないけど・・・。

「おい、単四型。」

神様が言つ。

「なんでしょう？」

「どれくらいで完成するんだ？」

「二十分ほどです。」

「そうか。」

とのこと。しかし、問題が発生する。二十分で完成する。つまり、妹の所にはあと一時間ほどで着かなければならない。とつぐに五時間経過している。しかも妹の居場所は僕にはわからない。

「おい、陸、ちょっと待つておけ。ここだ。二十分以内に戻つてくる。」

「は、はい。」

そう言つて、神様は巣を立ち去つた。

「ねえ、単一型さん。」

「なんありますか？」

「なんで電池メンはこんなところで色々やつてるの？」

一番答えにくい質問なのだろうか。単四型は少し考える。「わかりました。その理由を答えましょう。」

「ありがとう。」

「私たち、電池メンはいわゆるエネルギーなどに今まで利用されていました。ところがある日、電池メン単三型の一人がこう言つた

のです。『消費されるだけじゃなくて、生産もしてみたい』と。その言葉をみなが受け付けました。そこで、私たちは自分たちのエネルギーを何かに使えないかと、考えました。その結果がこの巣です。工場のよくなところで、リーフ電池などたくさん作ることが出来ます。それからは、私たちが消費される代わりに、私たちが生産した電池が消費されるようになりました。三百万年ほど前の話です。『へ~。電池メンつてそういう歴史を持った人々なんだね。』

「はい。それでもう、こちらはとても栄えています。」

そんなことを話しているうちに、神様が帰ってきた。どうやら、取ることの出来なかつた聖なる水を持ってくれたようだ。

それと同時に単四型もやつてきて、リーフ電池を渡してくれた。「おい、陸。ここにはもう用なしだ。そろそろお前の妹のところに行こうじゃないか。」

「そうだね。じゃあ、電池メン単一型さん、ありがと。僕らはそろそろ行くよ。」

「はい、わかりました。元気でいてくださいね。」

「うん。わかったよ。そちらも元気で。」

そう言つた後、再び真っ暗な空間が現れて、嘔吐寸前の状態になりそうになる。

田を開けると神様がいる。

「イモウトヲサガセ」

棒読み?

「ハヤクサガセ」

「神様?」

「イケ」

神様にシッしと手で払われてしまつたので仕方なくオレは神様の変な様子を気にしながらも陽菜を探す事にした。

「おひやー」

「顔が黒くなつてゐる女神様がいた。

「ど、どうしたんですかその顔？？」

「ああちよつとね」

女神様はサンがしたのと同じような顔をした。

「あの、神様が変なんですけど・・・・」

「あいつは昔から変よ」

「いや、そういう事じゃなくて・・・・」

「なんでか知りたい？」

「え！？女神様実は知つてたんですか？」

「当たり前じゃない！だつて私がえん・・・・じゃなくて部下の事は何でも知つてるのよ！」

「アアアアアアアアツアアアア～～～～～」

後ろから神様の棒読み叫びが聞こえる。

「か、神様！？」

オレが後ろを振り向くと神様は何かの穴に吸い込まれそうになつてゐる。

「神様！」

オレは神様に向かつて走り出す。

「無駄よ

オレは女神様に肩を掴まれた。

「離してください！」

「あいつは地獄へ送つたわ

「え！？」

「次からは私がインストラクターとしてついてあげる！あんなヘッポコよりもこっちの方がもとに戻れる確立が高いわよ」

「やだ！離して！・・・・離せえ！！」

「もう無駄・・・・閻魔様に言つちやつたもん！」

「神様は何にも悪い事してない！悪い事をしてるのはあんたの方だ

！」

「キャンペーン参加者に専属してゐるインストラクターが消滅、音信

不^ト通などの場合は代わりのインストラクターがつくるよ！」

女神様の目がぎらつく。

「いいわね！今から私があなたのインストラクターよ！」

「それはどうかな？大天使君！」

女神様の後ろに氣の優しそうなスースを着こなした男の人がいる。

「あら、何かしら？」

「何かしらはこっちの台詞だね！だれもあんたからあの神様を地獄に落とせとは聞いてないんだけどなあ～」

「そ、そう」

話の流れ的にバリ空気が読めるオレはスースの人が閻魔様だとう事に気が付いた。

「閻魔様？神様が最近教師始めたって言つてた閻魔様？」

「ああ、そうだよ。陸君。この大天使は悪い人さ。だからね。」

と言つて、耳元に呟く。

「大天使を地獄に送るうつと思つんだ。そうすれば神様も元通りに戻つてくる。」

「でも女神様はとても強く強いから、誰の手にも負えないって言つてましたよ。」

「大丈夫、地獄に送るだけ。私になら出来るよ。」

そう閻魔様は言う。女神様はこちらを見て、イライラした顔を見せている。

「大天使、地獄に行つてくれないか？」

「いやです。私が地獄に落ちたら今まで長い年月をかけてつけた力が封途されてしましますから。」

封途、よくわからない単語が出た。しかし、空氣的、流れ的には力が使えなくなるということだろ～。

「なら、大天使、君を完全消失させる。そのときに手に入った存在の力は全てこの、平田陸君に授ける。」

「は、はあ～？閻魔様、ということは、僕は何がどうなるんですか！？」

いきなり驚いた。誰にも止められないと噂の女神様の力を自分に授かれる？意味がわからない。

「とりあえず閻魔様、そんなことはさせません。リアルの人間にそんなことをしたら……。」

「おそらく、『イリオス』の能力を手に入れる。その際に『神宝』は砕け散って、リアルの世界が『ヨクト』に入れ替わり、ジオルの世界が『ヨタ』に入れ替わる。」

よくわからない単語続出。もはや解読不能だ。

「あの……。『イリオス』って？」

「ああ、『イリオス』とは、世界変革能力だ。だから、仮にその能力を持つた上で、こうなつて欲しい。そう思つただけで、世界は変わる。ただし、その能力を手に入れたのは一人だけさ。その人はもういなけれど、この世界の創造主と言われている。何年ぐらい前の話なのかな。」

世界変革能力……。一回そんな能力を持ちたいと思つた。そして、閻魔様は指から光の玉を出して、なんやらの呪文を唱える。

「きやあああああ！！！」

その瞬間、女神様は、どこかに消えた。

「あれ……。」

唖然とした僕に閻魔様は言う。

「大丈夫、地獄に送つただけだ。おそらく君のパートナーはもうすぐ戻つてくるよ。元通りになつてね。」

そう言われた。パートナーを神様だと認識して、待つ。

そして、どこからも無く、現れてこう言つた。

「陸、心配させたな。とりあえずお前の妹のところに行くぞ。」

「う、うん。」

そう言って、閻魔様に別れを告げた。

「がんばれよ。じゃあそろそろ、学校に戻るよ。職員会議だからさ。」

「そう言って、僕らより先に消えた。」

「じゃあ行くか。そろそろ。大丈夫だ。妹の場所はしっかりと把握している。」

「そうですか。じゃあ行きましょう。」

「ああ。」

だんだん友情が芽生えてきたこの一人。

再び真っ暗な空間に出る。今度は嘔吐しそうになく、なんだか慣れが出てきたようになんでもなかつた。神様に認めてもらえたのだろうか。よくわからないけど。

「とりあえず言つておく。リアルではもう一日経つている。それだけだ。」

「わかりました。」

そして、出た先には妹がいる。一日経つたということは、夜の間ずっと僕のそばで起きていてくれたのだろうか。ありがとうと言いたい。

「さあ、行けよ。お前が選んだ体だろ?」

「はい。」

そして、妹にテレパシーで語りかける。

第五話 暴言、愛の如し

またせたな

『お兄ちゃん?』

ああ待つててくれてありがとな!

『別にゲームしてたから暇じゃなかつたよ!』

・・・・・・・・・

オレはお礼を言つて損をしたような気がした。

「そろそろ妹にもお前の姿が見えるはずだ!」

「か、神様!」

「ああ、実に不覚だつた・・・・まさか大天使が七年前のことを根に持つていたとはなあ・・・・・」

「七年前?」

「ああ、七年前大天使の目を盗んで大天使のタイヤキをネコババしちやつたんだよ!ずっとそれを根に持つてたみたいでさあ~」

「それで地獄に落とされたんかい!」

「お兄ちゃん?」

「おー見えるようになつたか

「誰?このキツコロは? ?」

キツコロというのはもちろん愛地球博のイメキャラのキツコロで無く短縮言葉だ!時間が無いが説明しよう!

キ = キモくて

ツコ = 殺したいほど口臭のキツイ

口 = 老人

となる!

「キツコロがあ・・・・うれしいなあ!」

やはりこの人KYOだ!

「へえ、キツコロって言つて喜んだのおじさんが始めてだよ!」

陽菜もKYOかい!神様がキツコロの意味知らないの感覺で分かれ

よー

「ま、私はキツ『口』じゃなくて神様だがね・・・」

「お兄ちゃん、この人逝っちゃってない?」

「五分の四位は・・・・・」

「さ、時間が無いのでさつさと『神宝』を探しに行きますよー。」

「でも神宝はもう・・・・・・」

「まさか自分がイリオスつちゃつてるとでも思つてる系?」

「違うの?」

確かに閻魔様はオレに「イリオスの力を授ける!」とまで断言はしてなかつたな・・・・・・・・・・

「じゃ、行こうよ!」

陽菜の声で現実に引き戻される。

「よし・・・・・・・

「行こうかね」

そう言つとなぜか神様はナメクジのように這つて進んでいる。

「と、言つわけで、そこの一入、と言つてもパートナーなだけだけどね。」

「つるさい、バカ、だまれ、キツ『口』。

さつそく無表情に暴言來た。

「でさ、変な人」

「変な人じやないだろ。この人は神様だ。」

「ふーん。でさ、変な人。」

僕の言つた事を無視する。そして、妹が神様に暴言を連打することにより、神様は六分の五位逝きそうな勢いだったが、あまりにも早いと言わざるを得ない早さで立ち直つた。

「さつそくだが、このキャンペーンは対象の体と誰かの体を入れ替えることでやつと効果が出るんですがね。はい。っていうか陸の妹さん~聞いてますか~? 僕たちここまで来るように超苦労したんですけど~? その苦労わかつてますか~?」

「うるさい。変な人。」

「

はい、この一言で会話終了。

かわいそうな神様を見捨てて置けなくなつた僕は語りかける。

「ごめんなさいね。陽奈は無表情に暴言を吐くやつですから。」

「陽奈つていうのね。もう本当にかわいそうだよ。俺。人生九百万年ぐらい過ごしてきましたけど、今まで一番、本当にかわいそうだよ。」

「あ～かわいそうですね。残念ながら陽奈は僕に対して暴言はありませんから。その代わり『キツ口』に出会うと、すっげえ暴言吐きますよ。」

陽奈のいやなところを少しだけ話した。本当に嫌なやつでしたから。「で、その『キツ口』ってなんなのさ？」

僕に言われた。とりあえず、かわいそうだけど、訊かれたからには言わないとね。僕も半分神様いじめてるつもりだけど

「え～と、確か略語で、『キ』がきもくて、『ツ』が殺したいほど口臭のキツイで、『口』は老人。だったような気がします。」

「きもくて殺したいほど口臭のキツイ老人。ねえ俺老人に見える？これでも九百四十三万年と五千一百十年過ぎてきたけど、肌の手入れはちゃんとしてるよ。なのに老人つて・・・。」

きゅうひやくよんじゅうさんまんこせんにひやくじゅうねん。うはー、平仮名めっちゃなが。それに比べて9435210年、なんという読みやすさ。素晴らしいアラビア数字。

「ねえ、息も臭くないでしょ？」

「いや、臭いです。ニンニク臭いです。ぎょーや食べた？」

「き、昨日の夕飯・・・。」

とのこと、やはり息が臭いのは今まで我慢してきたが、臭い。めつちや臭い。

「ほら、ガムあげますから。臭い息もそれるミニントのガムですよ。」

「ありがとう。本当にありがとうございます。」

と、言われる。ガム一枚でこんなに感謝される」とつて滅多に無いんだが・・・。

「でも、いい加減にしよつぜ。無表情で暴言吐くのやめよつぜ。陽奈。」

とりあえず、陽奈に言つておく。キックロード出合つたときは必ず言う。そして、いつも通りに陽奈は答えた。

「嫌です。無理です。断ります。暴言は文化です。暴言は正直さを表すものです。暴言は私の宝物です。私を殺すつもりですか？」でた、基本的暴言の尊重。これは人権を暴言に言い換えたもので、その中身も暴言しか尊重されてない。これは僕が名づけたもので、妹も納得してくれた。

でも、よっぽどのことが無い限りコイツの暴言は直らないだろう。目上の人にも、同級生にも、下級生にも幼稚園生にも気に入らなかつたら暴言を吐く。なんという暴言好きだ。こんな妹、この世に一人だらうよ。

「変な人。いい加減帰つていいですか？暇です。」

「ねえ、なんで君はそんなに暴言吐いているのに暇になるの？気持ち良かつたりしないの？ねえ、聞いてる？」

神様がなんだか今までに無い妹の負け方をしてこのままでは納得いきそうに無い模様。

「これが日課ですから。もう飽きちゃいました。」

「じゃあやめようよ。なんでやめないの？」

泣き狂いそうな神様はそう言つ。無駄だとは思ううナゾなあ・・・。

「無理です。癖になっちゃいましたから。人間そう簡単には変われませんよ。わかりましたか？」

テレパシーで話している時の性格とは有り得ないほどの違いだ。口イツ、ヤバイ。意味不明な暴言で神様を泣かせちゃつてるよ。

「ねえ、君。目的わかつてる？」

「つるさいです。変な人。でも一応答えましょ。『神宝』というものを手に入れてお兄ちゃんを生き返らせるんですよね。お兄ちゃんから聞きました。」

「じゃあさ、僕の言つこと聞いてくれない？そもそもしないと『神

『神宝』手に入らないよ？」

と、言う。たしかにそれはそつだらつと、陽奈は納得したようで、歩くのをやめて、こう言ひ。

「じゃあさつさとそれを言えよ。変な人。」

「変な人じゃないですよ。無表情でそんなこと言つて人初めて会つたよ。たぶん。で、とりあえず、ここから移動したいと思つ。その場所で『神宝』を探すことが出来るから。」

もう手に負えない陽奈の話し相手を神様に託したところで、神様があの真つ暗な空間を利用して移動しようと、言つた。

そして、陽奈が首をコクリと動かしたところで、田の前が真つ暗になる。そして、田が開けたところにはある光景。

電池メンの巣だった。

「何処ココ？」

と、陽奈が言つ。

「ああ、さつきも来たんだが、電池メンの巣と言つてな、電池が住んでる。」

「ふーん。あつそ。」

やつぱりこの妹ひどい。絶対ひどい。

「で、神様、今度はリーフ電池の次に何を？」

「ここには『神宝』のパー^ツがある。三つのうちの一つだ。そのついでに、リーフ電池と電池メン单一型に着いてきてもらいつ。」

とつさにリーフ電池に関連付く単語を思い出す。そして、神様に質問。

「といつと、陽奈の物理分身を？」

「その通り、聖なる水はあるしね。それと、单一型の能力で『ヨクト』の世界まで飛ぶように頼む。『ヨクト』には俺の力では飛べないんだ。」

「『ヨクト』にも『神宝』のパー^ツが？」

とりあえず、勘付いたことは適当に言つておぐ。そうでもしないと何もしゃべれなくなつてしまつ。

「ああ、違う。『エクト』には俺に代わる次の神様がいる。だからソイツに会つて、俺はそこで元の仕事に戻る。そななのね。」

「こうことは、この神様とはもつすぐで別れとこになる。やつといい加減な神様から離れられそうだ。」

「ちなみに言つて、今までかよつビジオルの時間で一日経つた。だから、あとリアルの時間で三日以内に『神宝』を探さなきやそのまま死ぬ。わかつてゐな？」

「わかりました。じゃあ入りましょうか。」

何も口出ししていなかつた陽奈は、ちょっと田をキラキラさせて、ここに入る。そういうや陽奈はなぜこんなところに来ても驚かなかつたのだろうか。

「ここにちは、私は電池メン单一型です・・・。またこいつしゃつたんですか。それとそこのお嬢さんは？」

相変わらず单一型がここを任せられているようだ。

「单一型、とりあえずここに置いてある、『神宝』を取りに来た。許可をいただきたい。」

「わかりました。では單二型に任せさせてください。」
そして、また五つもある笛の一つを吹いて、單二型だと思われるやつがやつてくる。

「ここにちは、俺は單二型、『神宝』のありかを途中まで教えてやるぜ。着いてきてくれ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1415d/>

リバイバル・ヨミ・プロジェクト

2010年11月12日19時13分発行